心の糧（かて）

一冊の本から

家の本棚に眠っていた「矢板の伝説」という本を何気なく開いて読んでみると、予想しなかった面白さに驚きました。

矢板という土地に居なければ分からない、自然の良さと厳しさ、その厳しさに苦しむ人間の無力さ、そしてその厳しさに立ち向かう強さと努力する人たち。また、社会の仕組みの中で喘(あえ)ぐ人たちの悲しみ、その悲しみをはねのけようとする行為の機智に富んだ面白さから、この土地の人たちの思いが時を経た今でも私の胸に伝わってきます。

風土が作り出す自然への取り組みや、社会組織が作り出す人間関係がその土地の人柄を作り出すのだと思うと、知ることが楽しくなってきます。矢板に住んでいながら知らなかった伝説がたくさんあって、ワクワクしながら読みました。

そして、こんなに良い本を皆に読んで欲しい、特に子どもたちには読んで欲しいと思いました。自分たちの住んでいる街のことが分かれば、自分たちの街をもっと愛する心が育つのではないでしょうか。

同じ頃、図書館が主催する民話の講習会がありましたので、すぐに受講することにしました。自分たちの街に伝わる話を多くの人に知って欲しいと思ったからです。

この講習を受けたことで、さらに多くの民話や伝説と出会いました。栃木県を始め日本国内や外国の話を読む楽しさ、それはその土地のことを知ることでもあります。

何よりも、方言や郷土の歴史を調べたり、話し合ったり、時には現地へ行って話を聞いたりする仲間のできたことの喜びをしみじみと感じました。

こうした喜びもあの一冊の本から始まったのだと思うと、老眼鏡をかけて読んだ甲斐(かい)があったというものです。語りを通して話しの面白さを知ると同時に、郷土の良さを見直して、こうした民話や伝説にも親しんで欲しいと思います。

矢板市　女性

私の読書のはじまり

「読書」という言葉の意味が本当にわかりだしたのは、小学校（当時は国民学校）三、四年生だろうか。二年生になったばかりのある日、担任の先生が休まれ、代わりに男の先生が来られた。背の高い野澤先生だった。

「今日はぼくが代わりにやります。」と言われたかと思うと、

何冊かの本を教卓に置かれた。私たちはいつもと違う国語の時間に戸惑ったことを覚えている。担任の齋藤先生は綴り方を楽しく教えてくださったが、その一年間はあまりお話しは聞かせてもらえなかった。

野澤先生は「これから僕の好きな本を読みます。」と言われて、大きな、しかし、やさしい声で、「くもの糸」を読み始められた。ざわついていた教室もいつの間にか静かになったことを覚えている。二年生の私にとっては、あまりにも感動が強すぎて、もう何十年も前のことなのに、その時の先生と本の内容とが鮮明に浮かび上がってくる。次は「杜子春」を読んでくださった。今にして思えば、あの野澤先生は、芥川龍之介が好きだったのだ。

今、私は標準語（共通語）で朗読ボランティアをしているが、あのときの先生は、少しもナマリなどなかった?ような気がする。それとも三河弁も入っていたのだろうか。野澤先生は上の方のえらい?先生だったのだろうか?その辺のところは定かでないが、私が少々長い文章を読書というかたちで読み出したのは、三年生になってからである。先生の読まれた物語の中に「みにくいあひるの子」も入っている。なつかしい私の小学校の頃の思い出である。

家では、父のおみやげが、講談社の絵本。四人兄弟の長女の私は、いつも読み役。内容もさることながら、挿絵が素晴らしく、何故か高畠華宵の名前が第一に浮かんでくるのだが。絵本は、「くもの糸」「杜子春」などから比べるとかなり子どもっぽいものであったが、私たち四人にとっては宝物だったのだ。おみやげは本以外のものもあったかもしれないが、どうしても思い出せない。名古屋の病院勤務の父は、いつも家にいるというわけでもなかったが、四人の子どもによく自作のお話しを聞かせてくれた。本当は医者になどなりたくなかったと晩年になって言っていた。内科・小児科医の本好きの父ではあった。

私の読書の原点はこんなところだろうか。

真岡市　中野　直子

本との出会い

私には、忘れられない一冊の本との出会いがある。それは、私が中学校に入学して間もない頃であったから、今から四十年以上も前になるであろうか。

母に連れられ、近くに住む母の友人宅に行った時のことである。部屋には、整然と並んだ本棚がいくつもあり、この友人はかなりの読書家らしいことが私にも理解できた。長話を予想してか、その友人が一冊の分厚い本を私に差し出してくれた。当時、あまり本に興味を持っていなかったのと、大人たちの世間

話の方が楽しそうであったので、私は、その分厚い本を膝の上でパラパラとページをめくって遊んでいた。

何度も何度も、パラパラとめくっているうちに、トロッコの挿絵と「雪くる前の高原の話」が、目に止まった。それには、山から掘り出された石炭が、町の工場に運ばれていく様子が書かれていた。見知らぬ町への期待と不安を語りあう石炭、トロッコの悩みや苦しみの言葉が書かれた童話であった。

私は、いつの間にか本の世界に入ってしまい、母に帰宅を促されるほど夢中で読んでいた。残りの頁は、その本を貸していただき、家に戻って最後まで一気に読んだことを覚えている。その本は、「小川未明」の文学全集であった。これをきっかけに本の楽しさ・すばらしさを知り、さまざまな種類の本を読みふけった。こうした読書経験が、後になって私の子育てに役立つことになった。

娘が小学四年生の時、夏休みの宿題に読書感想文が出された。何を読んだらいいのか困っている娘に、未明の作品を薦めたことがあった。最初はとまどいながらも、私と同じように未明の分厚い本に夢中になり読んでいた。その娘も、今では一児の母になり、まだ一歳ではあるがその子に読み聞かせを始めている。やがて、この子も童話の世界に喜々とするのだろうか、とても楽しみである。

時折、母と共に訪れる友人宅。九十七歳になった現在でも、毎日、本を読むことを欠かさないという。年老いた二人のお茶飲み話に耳を傾けながら、私は、読書という生涯の楽しみを得た遠い日の時の流れを感じ、感謝している。

那須塩原市　小野崎　敏子

一枚の絵から

今年私は古稀（七十歳）を迎えた。立ち止まって、今こうあるのはどうしてなのだろうかと、来し方行く末を思うことがある。

私の育った頃は太平洋戦争が始まり、終戦を迎えたという時代であったから、生活は貧しく、特に戦後は食糧にもこと欠く程であった。そのような中でも世の中がだんだん落ち着き、本等も買えるようになると、母は私に毎月一冊の雑誌を買ってくれるようになった。「少女クラブ」である。連載小説に、ヨハンナ・スピリの「ハイジ」があり、蕗谷虹児の特徴あるさし絵があった。そして三つ折りにして西洋の絵がとじ込められていた。その中に印象的な一枚があった。ルノアールの「ピアノに寄る娘」の絵である。明るい色彩、ピアノ、カーテン、レースの服……これらへのはかないあこがれから、絵に関心をもつようになっていった。さまざまな絵を見るうちに、それを系統的

に知りたいと思うようになった。

名画といわれる一枚に出会うと、驚きをおぼえ感動し、それらが作られた時代がどんな時代であったか、作った人がどんな気持ちで作ったかと、さまざまな好奇心を引きおこしてくれる。そこで私は作者に関する評伝、書簡集、作者の生きた時代を書いた小説などを、見つけて読んだりする。読書を通して絵を再認識し、その中から歴史はくり返されることや、どのような時代環境にあっても多くの人々は精一杯生き、その礎の上に今の私たちがあることを実感し、人間の素晴らしさを知るのである。

幼い頃に得た好奇心が今頃まで続いているのを、自分でも不思議に思う。最近は細かい字を読むのも多少は億劫にもなってきた。けれども、絵を見、本を読み、講座を通じて知り会えた友人たちとの交流を楽しみながら、非日常の空想の世界へ心を遊ばせたいと思っている。

日光市　女性

幼い頃から感銘を受けた人と本

私が生まれ育った村は、現在では市町村合併で足利市になりましたが、大正昭和の初期には一寒村に過ぎず、山裾の小さな小学校には絵本すらありませんでした。

私の祖母は慶応生れ、士族の家に生れ育てられたためか、読み、書き、そろばんに長け、躾は大変厳しく立居振る舞いにも注意をされ、恐い存在でした。でも私が小さい頃は、祖母の部屋の菓子と昔話につられ、あまえておりました。「花咲じじい」「桃太郎」「こぶ取り物語」等々、行いの正しい良い人、欲深い自分本意の悪人と、善悪を判然と分からせる昔話が多く語られておりました。

たしか一年生の頃、初めて町の土産に買ってもらった絵本は、紙質が悪く原色で書かれた粗悪なものであったような記憶があります。それでも学校に持っていくと皆取り合って読みまわしをしておりました。

小学校も高学年になりますと、町の本屋が注文を取りに来るようになり、単行本で「レミゼラブル」「夾竹桃の花咲けば」「ああ玉杯に花受けて」といった長編小説を夢中で読みあさりました。五年生の受け持ちの先生が、毎日昼食のあと本の読み聞かせをして下さいましたが、毎日の時間が待たれ、話に引き込まれていきました。

強烈に頭に残っている話は「山椒大夫」でした。人買いにだまされた母姉弟が、別々の舟に乗せられ離ればなれになり、過酷な運命にもてあそばれながらも、互いにかばい合い、いたわり合って生きぬいていく姉弟愛に、毎日涙を流しながら聞き入ったものでした。最後に立派な国司となり佐渡に赴任され盲

目となった母親が、雀追いをしながら歌う「安寿恋しやホーヤホイ。厨子王恋しやホーヤホイ。」の歌声に気づき再会できた時には皆我が事のように喜んだことが思い出されます

小学校五年六年を担任して下さった先生の教育指導が実に立派だったこと、多感な少女期を過ごせたことが何物にも代え難く有難いことでした。

終戦直後の結婚、子育てに奔走真最中、昭和二十二年キャサリン台風で渡良瀬川は大氾濫、足利市は水害で大打撃を受けました。暗に漏れず我が家も床上浸水の被害を受けました。その時贈られたララ物資（敵国として憎み罵っていたアメリカのボランティア団体からの見舞品）を複雑な気持ちで荷物をとくと、子ども服にまじって一冊の絵本を見つけました。終戦直後の食べることのみに追われていた荒んだ心に良風を吹き込む、温かくすがすがしい色彩の「アンデルセン物語」でした。「マッチ売りの少女」「醜いあひるの子」「裸の王様」等々。美しい夢のある色調の絵本は、どの頁を開いても感動するばかりでした。

「マッチ売りの少女」は、金持ちの家庭の華やかなクリスマスの飾り付けとご馳走の団欒を窓越しに見ながら、最後のマッチの一本に火を付け、そのわずかな炎に手をかざし、暖をとり静かに天に召されていきました。少女の話は、子どもたちに幾度話しても泣けてたまりませんでした。「醜いあひるの子」自分に自信と誇りをもって生きる大切さ。やがて花開くということを教えているように思われました。権力におもねて、家来は王様のいうがままに従っているのに、子どもは純真に見えたままに王様の裸を笑いました。「裸の王様」は現代の大人の世界にありがちな物語と、深く考えさせられるものがあります。

現在では好きな時に好きな本が求められます。本を読んだ時、作者の言わんとしていることを考え熟読した時に、感動も一層深まるものです。「今の日本に一番欠けているのは人間らしい感情だと思う。豊かな情感、感情を取り戻すべきだ。」とある作家が言われました。一朝一夕で直るものではありません。お母さん方、先生方の小さい時からの良い本の読み聞かせ、家庭、学校教育の充実によって、感性あふれる喜怒哀楽の豊かな子どもらしい子どもであってほしい、これが、昭和・平成の子育て体験をしてきた者の願いです。

足利市　栗原　きよ

もうひとつの世界

一冊の本がひらく
もうひとつの世界
物語がひらく
もうひとつのこころの世界
そこで出会う
もうひとりの自分に
会いにでかけよう

一冊の本がひらく
もうひとつの心の世界
物語が照らす
あこがれや不安
やがてもうひとりのわたしが
動き出す
そしてほんとうのこころが
何に惹(ひ)かれ　何を信じ
何を求め　何を本当に愛するかを
感じ始める
それはきっとわたしを
「よろこび」でいっぱいにする
思いきって出かけよう
一ふりの勇気をはいて
もうひとりの自分に
会いに出かけよう

一冊の本がひらく
もうひとつのこころの内側
物語が映す
かくされた恐れや欲望
やがてもうひとりのわたしが
立ち上がる
そしてほんとうのこころが
何を憎み　何を悲しみ
何を拒み　何が本当に大切かを
語り始める
それはきっとわたしを
「強い力」でいっぱいにする

ひとり出かけよう
一ひらの希望をまとい
もうひとりの自分に
会いに出かけよう

一冊の本がひらく
わたしのこころの現実
物語が押し開く
わたしのこころの閂（かんぬき）
やがてもうひとりのわたしが
歩き出す
そしてほんとうのこころが
しまい込んだ苦しみを自由にし
なくした哀しみを歌いだす
それはきっとわたしを
「愛しさ」でいっぱいにする

そっと出かけよう
一かけらの夢をだいて
まだ見ぬわたしに
会いにでかけよう

真岡市　稲葉　治子

遠い日の祖母と朗読

ぬけるような青い空、白い雲、夏はまっさかりと思えるのに、子どもたちの夏休みは、もう終わり。みんな宿題完了したのかしら、「読書感想文が一番苦手。」と言っていたあの子は、書けたかしら、「本を読むのがおそくて駄目なの。」と言っていたあの女の子は、何冊読めたのでしょう？…等、しきりに気にしている私は、学校の朝の読みきかせ、訪問朗読をして十年となりました。

この夏十年の節目として、会員全員で「親と子のための読みきかせ」をテーマに、発表会を催しました。指導の役を引き受けた私は、各人の声の質にも合わせ、それぞれの人柄にもふさわしくと、懸命になったつもりでしたが、残念ながら会場は、空席が多かったのです。指導力の不足か、指導者としての知名度の低さか、それとも根本的に朗読そのものへの関心が地域にないのか、私は大変落ち込みました。

でも、常日頃学校の現場にいっている自分にとって、手応えは確かにあるのです。子どもたちは、学年毎にいい反応を示してくれるのです。聞く姿勢も良くなってきました。挨拶（あいさつ）もきちんとするようになりました。教室に入っていくと、今日は何を読んでくれるのかなと、キラキラした目を向けてくれます。読みきかせの本の中から、子どもたちは確実に何かを心に育てていると信じなければ、朗読は続けていけないと思います。発表

会で落ち込んだとはいいながら、後期の学校が始まれば、私はやはり子どもたちの前に本を持って立っているでしょう。

ここまで朗読の世界に魅せられている私の原点は、遠い日の祖母の言葉です。私は小学校三年生か四年生だったと思います。予習で読んでいたのか復習で読んでいたのか覚えてはいません。そして、題名も記憶にありません。ただ、国語の教科書の中の詩の一行で、「かんとさえた冬空」という表現のある柚子をうたった詩であったことだけは、はっきり残っています。

当時、七十歳くらいではなかったかと思う祖母が、それを聞いて「もう一度。」「もう一度。」と言ってくれたのです。そして、その夜から、毎夜、祖母の寝床の傍らで、国語の教科書を読む私になりました。あまり多くの会話はなかったと思います。ただ、「ありがとう。もういいよ。」と言いながら眠りにつく祖母の頬に、何度か涙がこぼれているのを見ました。私には、何の涙か思い計ることはできませんでしたが、その頃から私は、大変な読書家になりました。

読書の世界の中で私はいくつもの夢を育てていました。子どもなりに何人もの役を演じていました。ただ戦時中のことで、たくさんの制約のある少女時代でしたが、我が家の蔵には、たくさんの蔵書がありました。その頃から、いつか人に本を読んで聞かせたいと思う気持ちは、育まれてきたと思います。

今の書籍の全部が、上等な紙質、明確な印刷、美しい挿絵、手にしただけでどれもこれも読みたくなってしまう図書の多さ。こんなに溢れて恵まれすぎると、本は憧れるものではなくなってしまうのでしょうか。

お母さんたち、どうぞ子どものために、お祖母さんたち、どうぞ孫のために、たくさんの本を読んで上げて下さい。

そして、子どもたちの、孫たちの読む本を、聞いてあげてください。読書を通じて育てましょう。命の大切さ！人の心の優しさ！

遠い日の思い出の祖母よりもいくつか年を越えた私ですが、祖母が聞いてくれた私の朗読を、私は声の出る限り続けていきたいと思います。

大田原市　竹内　倫恵

おぼえていないの、でもありがとう

本を読んでいる時は私にとって至福の時間だった。だった？そう、だったのです。

サルトル、カミュ、カフカ、生意気盛りでした。モームやモーリス・ルブランには夜が明けるのも気がつかないほど熱中しました。

中堤助、高橋和巳、倉橋由美子にも夢中になりました。読書

会、作家を囲む会などもいきました。たくさんの人のお話も聞きました。「深く読まれていますね。」と宮尾登美子先生のお褒めの言葉を頂戴したこともありました。趣味は読書でした。

今現在、私はみんなの前で本を読んでいます。読み聞かせで輝いているのです。

十か月の赤ちゃん、お母さんの膝に抱かれ、私が絵本を読むのを聞いています。時々、「くっくっ」と声をあげて笑うのです。この十か月健診での読み聞かせは絵本の素晴らしさを改めて再認識、感動させられております。

子育て支援、保育園、学校。たくさんの所に読み聞かせに行っています。たくさんの本や詩を読みました。読み手と聞き手の一体感、それは宇宙なのです。それは想像と創造が奏でるシンフォニー。少々オーバーですが。そうなのです。

私は現代の児童文学・絵本に対し無知でした。地域文庫を手伝って欲しいと言われた時、三十三歳の私は「ええ～！」という感じでした。知らなかったもので。これが子どもの本との出会いです。例の如く、かたっぱしから読みました。絵本を見ました。そして、好きになりました。敬愛する先輩の「貴女がやるのよ。」のあの鶴の一声に今となっては幾度感謝したことやら。本は個人的のものではなくなったのです。

しかし、避けて通れないものが私の行く手をさえぎるのです。加齢とともに全てが衰えはじめました。特に目。大好きな絵本、読み聞かせがやりづらくなってきました。捨てる神あれば拾う神ありと、今度は民話語りに出会いました。公演（？）の場が大人、お年寄りまで広がったのです。

私は宮城県、それもほとんど岩手県に近い若柳町という田舎町で生まれました。戦争の終わったすぐ後でした。祖母は私が三歳の時に亡くなったそうです。覚えていないのです。「おばんちゃん」と呼ばれていました。このおばんちゃんが私を抱っこして、毎日毎日、本を読んでくれたそうです。何の本か分かりません。三冊しかなかったそうです。

このことは私の「三つ子の魂」になったのです。その後、私は本の好きな子で通ってきました。今も好きです。それに今では読んで聞かせるのも、語るのも大好きです。私は今、私のおばんちゃんになっています。

私に素敵な出会いと生き方の種を蒔いてくれた人、おばんちゃんありがとう！

壬生町　橋田智恵

読書のよろこび

寝床の周囲にまた本が並び始めた。

本に親しむようになったのはいつの頃か。思い起こせば小学校の高学年の授業にさかのぼる。いろいろな教科があったにも

かかわらず、算数の九九をいつの学年に教わったのか思い出せないのに、国語の時間だけは鮮明に思い出される。

五年生だったと思う。教科書を一人が音読をする。つまずいたら気がついた者がすかさず読み継ぐ時間があったり、読んだ本を級友の前でそらんじて話を聞かせる時間もあった。誰が何を話したのか覚えてはないが、自分は「おむすびころりん」を話した。

六年生になって、三浦敬一郎さんの子どもの頃スキーを習う情景(ここで中学生になって教わる英語の一つの単語を覚える。ＣＡＲＥＬＥＳＳ・不注意な)、炭焼きの技術を親が子に教える(ここで炭に適した木、木をかまにつめる方法、木が炭になると煙が紫色になることなどを学ぶ)。芥川龍之介の「トロッコ」は、家のそばで河川工事が始まっていて、物語の子どもと同じスリルを味わった。

今のように学校全体の図書などなかったが、各々の学級の教室内に、生徒から見て黒板の右側に、縦一メートル横九十センチ程の本棚が備え付けられ、学年向けの本が納められていた。「神州天馬侠(しんしゅうてんまきょう)」「ノーチラス号海底二万里」(ここで潜水艦を知る)「巌窟王」に胸をとどろかせ、「孝女白菊」「ブラックビューティー」(黒馬物語)「母を訪ねて三千里」に涙を流し、「ファーブル昆虫記」「シートン動物記」では人間以外の世界に魅せられた。業間の休み時間は、もっぱら本棚の本を読むのに費やされ、読むのに家にも借りていった。とにかく予習、復習とかの覚えはなく、教科書以外の本をひたすら読みあさった。

中学生になってからはちょっと背のびして大人の本に手を出したり、世界文学全集とか日本文学全集とかの大作に挑戦した。フィクションあり、ノンフィクションあり、手あたり次第むさぼり読んだ。

とにかく小学校の国語の授業が発端となって、活字の魅力にはまりこんで抜け出せないでいる。文字により時空を飛んだり、その場所にいかなくとも物事が判ったりと、本に向かい合って五十年余、寝る前の一服は新聞や本を読むことに喜びを感ずる今日この頃である。

塩谷町　斎藤　カツ

若き日の読書

農家に生まれ育った私。幼い頃、「桃太郎」や「一寸法師」等々の昔話は知ってはいたが、親が読み聞かせてくれたのか、祖母が話してくれたのか、定かな記憶はない。多分、子どもの世話は、祖母の役目のような家だったので、祖母からの話を聞き覚えたのだろう。どう考えても、読書環境の整った家に生育したとは思えないし、読書好きな少女であったとは言い難い。

私が本の面白さを知ったのは、小学五年の時の担任の先生が、よく少女小説（吉屋信子の作品が多かった）を読み聞かせてくれたことに起因すると私自身は思っている。

敗戦の色濃い昭和十九年、女学校に入学。当時農家は人手が足りず、子どもといえども農事・家事を一人前に課せられるのが常であった。我が家とても例外ではなく、学校から帰るとすぐ家事を手伝わされ、休日には、農作業を手伝わされた。「本を読むなんてとんでもない。」「読む暇があれば家の手伝いをしろ。」と叱責（しっせき）された。したがって本を読むのは、勉強しているふりをしながらか、夜、家族が寝静まってからという状態であった。しかし、小学生時代に覚えた本へのあこがれは抑えがたく、友達から借りたり、家にあるわずかな本、雑多な本を読んでは欲望を満たした。

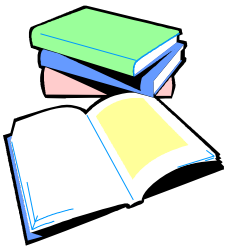
当時我が家には、不思議なことに、婦人之友社の羽仁もと子著作集の一部があった。――多分叔母が読んだものと思うが――その中の「家信」「若き姉妹に寄す」は、今でも心に残っている。夏目漱石・芥川龍之介など文学史上に残る作品も次々と読んだ。中でも「こころ」での深層心理の描き方に興味と感銘を受けた。その他、政治や思想に関する本や大衆小説などに心ときめかせたこともある。

学制改革により、女学校が、中学・高校に変わり、大学進学の頃までには、世の中も平和・民主主義等が一応形をなし、学校図書館も充実し、そこに入ると、読みたい本にすぐ手が届き、あれこれ読みあさるのが楽しく嬉（うれ）しい時を過ごすことができた。学校の往復など、友達と読後感などを論じあったのも充実感のある懐かしい思い出だ。かなり背伸びをして生意気な論じ方ではあったが――。

現在のように、ちまたにたくさんの本があふれ、読む時間もたっぷり与えられ、読書指導も盛んなよき時代に、活字離れ、読書離れが問題となっていることは、何とも皮肉なことである。

西方町　女性

経験こそ宝物



もう三十年ほど前のことです。

社会人になって十数年を過ぎた頃、市役所に勤めていた私は何回もの人事異動により、いろいろと悩む日々が多くなりました。

そんな折、いつも私を励ましてくれたのは今は亡き父でした。新しい職場での慣れない仕事に失敗したり、全く考えの違う人

たちに出会い驚いたり苦しんだり、さらに仲の良い友人でさえ時として意見が合わず戸惑うことがありました。しかし幸せなことに、父は自分の子どもに味方することなく、いつも冷静に私の話を聞いてくれました。

丁度その頃、新聞の広告欄に「経験こそわが師」という本のタイトルが目に入りました。父がいつも話の最後に言ってくれた「自分以外の人はみんな自分を育ててくれる先生なんだよ。」の言葉にピッタリの本に出会ったと思い、すぐ買い求めました。著者の扇谷正造さんは「人は『人生大学』で学ぶことが多い。」という体験豊かな経歴の持主です。働く者の生きがいや知恵を、たくさんの事例を通して分かりやすく書かれた本でした。

「経験ほどすばらしいものはない。たとえそれが失敗に終わろうとも、何もしないよりはるかに意義のあることだ。」というのです。また、「人はミスをおかし、恥ずかしい思いをし、その都度成長していくものかもしれない。」という言葉にとても励まされました。この本を読む前は自分だけが失敗ばかりしているように思え、夢も希望もないほど落ち込んでしまったのに、読み終わった時のあのほっとした気持ちは、何ともいいようのない安心感となりました。

そして今、介護度四となった九十三歳の母を看取る毎日となりました。寝たきり老人にさせないよう、足がすっかり弱った母を抱き抱えながら部屋を移動しています。これも母が「老いの日々とはこのようなものよ。」と老いに向かって歩きはじめた私に教えてくれているようです。そう考えると母は老人学の大切な師なのだと思えてなりません。

はるか遠い日に読んだ一冊の本は、その後の私の人生にすばらしい道しるべを与えてくれました。

足利市　女性

絵本との出会い

幼い頃、戦地から帰って来たばかりの父が、おはなしや童謡を歌って聞かせてくれました。それを私は子守歌のように聞いて「今日はどんなおはなしが出てくるのかな?」と楽しみな一時でした。そのうち弟が生まれ、二人で毎夜父の物語を聞きながら眠りにつきました。

小学生のころは「幻灯」もたくさん見せてくれました。中でも影絵のような「蜘蛛(くも)の糸」には強烈な印象があり、未だに残像のようによみがえってまいります。

社会人になって、老人ホームの利用者のために芸を披露することになった時、大型紙芝居を作りご覧いただきました。この紙芝居は学校、自治会、老人会など、いろいろなところで実施しましたのでボロボロになってしまいました。

それからしばらくして町の図書室から「絵本を読んでみませんか？」との案内を見て、私は早速会員になりました。会員となった方は十人くらいでしたが、仲間が「子どもたちに絵本を読んであげたい！」ということになり、やがて「読み聞かせの会」ができました。公民館の図書室で始めた「読み聞かせ」も毎週となると、子どもたちが集まらず、学校への進出を試みました。ちょうど運も良く学校からの依頼も順調に増え、年間七十余回を重ねることも数年続きました。今私は休会中ですが、今でも学校への活動はもっと増え、年間の大切な行事になっていると伺い、大変嬉しく思っております。

小さい時からの「おはなしを聞く」ことから始まり絵本を読む会に入ったことがきっかけで、他のいろいろのボランティア活動に入ることになり、今では多くの人たちと知り合うことができ、赤ちゃんから高齢者まで、町中どこへ行っても知人がいて、とても楽しい毎日です。

思えば「絵本を読んでみませんか？」のさそいに乗ったことからの発展で視野が広がり、行動も活発になり、人と話をすることも好きになりました。ほんとうに不思議な縁だと思いますが、私にとっては有難い絵本との出会いでした。

益子町　女性

本とのおつきあい

今までの本とのおつきあいを考えると、環境が良いというのか、実家が書店を経営していたので、子どもの頃は手の届く所に絵本も児童文学全集も並んでいた。気に入った本をいつでも読むことができたのだから幸せなことだったが、この頃心に残った本はと考えると思い浮かばない。きっと手当たりしだい本をめくっていただけなのだろう。

高校時代、学校の図書館で出会った一冊の本、マーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」は、読み出したら止まらず、定期試験の前にもかかわらず、スカーレットの勇敢な生き方と美しさと強さに引き込まれ、徹夜で読んでしまったことがある。しばらくは、自分が南北戦争の時代にタラの農場やアトランタの町に住んでいるような気分になり、レッド・バトラーの男性的魅力にはまり夢中になったものだ。

娘が高校生の時この本を薦めたことがある。どんな感想かと尋ねたら「あんなに自分勝手に生きてきたスカーレットは、アレッシュの優柔不断さが見抜けず、結局バトラーの愛情も失った周りが見えない不幸な人ね。」と言った。私は読んだ後も何日も興奮していたが、娘の方が現実的だ。なる程本を読んでそこから得る思いは人それぞれなのだ。

しばらく本とのおつきあいも途絶えがちだったが、嬉しいことに最近お友たちから読書会にさそわれた。月に一回図書館で

開かれる十人程のメンバーで二十年の歴史がある会だという。良い機会と思い、またこれからどんな本とのおつきあいができるか楽しみにしている。

佐野市　女性

本と人との出会い

「毎日、ただぼんやり過ごしています。何のために生きてるのか―。張り合いもなく、そんな自分がとてもみじめで、みじめで。」

小雨の降る朝でした。ごみ処理場で久し振りにあったKさんから、ふともらされた淋しそうなことば―。

「此(こ)の間おあいした時は、忙しそうに草とりをしていたのに。どうしたの。」

心もち面やつれし、元気のないKさんのことばに内心驚きと共に、どうしたのかなと不審の気持ちでいっぱいになりました。雨の中の立ち話でもと思って、少しの慰めのことばをかけただけで「またね、元気だしてよ。」といってそのまま別れてきました。

Kさんは、早いうちにご主人を亡くし、その上たった一人の息子さんにも急死され、今は一人で畑の仕事をしながら生活しているのです。Kさんのあの言葉と、面やつれした姿が気になっていましたが、なかなか時間もとれない日が続きました。

しかし、どうしても心にかかっていたので、数日後Kさん宅に出掛けていきました。矢崎節夫さんの著書「金子みすず・こころの宇宙」という単行本を持って―。「雨の日にでも、読んでみて。私もすごく気に入ったの。」といって雑談をしたあと、その本を置いて帰ってきました。

二十日くらいたったある日。「こんにちは！」と玄関に訪れたKさん。みちがえるような明るい笑顔で。「有難うございました。感動しました。自分の環境をあるがままに受け入れることが幸せの近道なのだと思いました。この本を読んで、前向きに生きようと思いました。」と言うのです。私もこの本を何度も繰り返し読んでは、心が洗われていたので、心を閉ざしていた彼女に薦めてみたのです。

二十六歳の若さで夭折(ようせつ)した天才童謡詩人金子みすずの生涯を美しい詩と共に綴(つづ)ったこの本で、彼女は何をわかってくれたのでしょう。自分のせまい小さな世界でなげき、くよくよしていたことを反省してくれたのでしょうか。「生きる」ことの大切さを感じ取ってくれたのでしょうか。特に、

「この裏まちの／ぬかるみに／まるいお空がありました。とおく／とおくうつくしく澄んだお空がありました。この裏まちの／ぬかるみに／深いお空がありました。」

の詩が、彼女はとても気に入ったということでした。

味気ない一人暮しの自分も、自然の美しさ自然の偉大さに感動し、環境にもめげず前向きに生きていこうと決心したそうです。

伏し目がちに、寂しそうに、青白い顔をしていたKさんが、一冊の本との出会いにより、自分の生き方を見い出し、明るく立ち向かっていこうと決意して下さったこと―。私自身も深い感動をおぼえました。

この金子みすずの本の中で、小学生の男の子が、「みすずさんの詩は、百科辞典です。普通の百科辞典では得ることのできない『やさしさ』がいっぱいつまっています。これからの時代、この百科辞典の中身のような優しい世の中になってほしいです。」と綴(つづ)っていたことを私も思い出しました。

人の心の優しさや、明るく生きるということをこの本を通して知ったKさん。閉ざされていた心を開き、これからは目標をもって生きていこうとする勇気と生活の指針を見い出してくれたのだと思います。

私の薦(すす)めた本を通して心の安らぎを感じてくれたこと。生きる力を見出し生活に大きな自信をもってくれたことに、私も何にもかえがたい喜びと感動をおぼえました。

私自身、あの本との出会いに感謝し、これからも私の励みにしていきたいと考えています。

藤岡町　女性

本がつなぐ三世代

高校時代、恩師の「二十歳を過ぎても本が読めるようなら、一生読み続けることができる。」の一言を支えに、それから五十年、古稀(こき)を過ぎた今でも本が大好きな日常をおくっています。

佐野市立図書館創立二十周年記念事業のひとつとして昭和四十六年十一月に発足した、佐野婦人読書会に参加し、現在も入会して居ります。当時、市内の小学校ＰＴＡの三十名のお母さんたちからの会員構成でした。読書を通して時代に即した生き方を学ぶには、当時は最高の場でした。

しかし、ＰＴＡ活動の終わりと共に、多くの人が去っていきました。その後も年を重ねるごとに、健康を害し本を手にすることが苦痛になった人たち、八十歳を過ぎても参加し続け、無念の病であの世に旅立たれた人など、多くの仲間との別れがありました。今は八名となりましたが、月一回の図書館での会、年二～三回の文学散歩など続けています。

昭和十六年、小学校に入学した私は、家にあった分厚い表紙の子ども用の世界文学全集とか、日本昔ばなしなどを読みました。「ああ無情」「小公子」「小公女」「宝島」「ピーターパン」。そして、「孝女白菊」「怪談」「青葉の笛」などです。

そして志願兵として南の海に散った兄から送られてきた、「南国の水牛」と、その世話をするトッポー少年の話の本を、今でも鮮明におぼえています。母はそれをあの世界に持っていって

しまいました。その母が特に本好きだったので、戦後もたくさんの本に囲まれ幸せでした。が、食糧難のためいつも空腹でした。本の中にパンやごはんなど食べ物が出てくると、たまりませんでした。

私が本を読むということは、この頃から現実逃避が一番の目的といっても過言ではありません。よく、登場人物になっている私を見て、家族がおどろいていた笑話もあります。

二人の息子たちにも「ずかん」から始まり私が読んだ本も多く読みきかせ、読ませました。

「路傍の石」「壺井栄全集」「ビルマの竪琴（たてごと）」、そして、いわさきちひろの「戦火のなかのこどもたち」、私の記録も載る戦争で兄を亡くした「妹たちのかがり火」も与えました。そして親子三人で、小さな我が家の読書会も兼ねて話合いも持ちました。

やがて、孫の時代に入り、次男は二人の子どもに、愛読書の「三国志」から名前を付けました。崇暁（タカトキ）、誉彬（モトアキ）なかなか一度では読めません。

昨年、私の七十歳の誕生日から少し過ぎた頃、長男の小学一年の息子が突然泣いたとのこと、理由はお祖母ちゃんが老人なのでもうすぐ死んでしまうので、かわいそうだとのことでした。私は自分の本箱から「千の風になって」の絵本を送りました。十二行の詩が、祖母にできる答えでした。詩と同じような考えはいつも私にはあったのです。孫は学校の図書室にもその本は置いてあったと報告してきました。おどろき、嬉（うれ）しかったです。

今年の夏休み、孫は谷川俊太郎の絵本「がいこつ」も読みました。ボクと亡くなった女の子のお話です。二年生になり、死と素直に向きあっているようです。

読書感想文は「ぼくのえんそく」、自由課題を選んだとのことです。かぜを引いて遠足に行けなかったぼくが、気持ちになって参加するお話で、千二百字に挑戦しました。後で読ませてもらうのを楽しみにしています。孫たちと本の話をして、三代の我が家の小さな読書会を開くことができるのを願っています。

佐野市　鈴木　勝子